

世に満ちる奇妙不可思議を愛好し、健康指標から眼を反らして旧型酒に酔っぱらう、ろくでなし達が集まる店。バー・オールドアダム。秘封倶楽部の活動の一環で訪れて以来、すっかり常連になってしまったその店で、私達はささやかな週末の一時を楽しんでいた。

「乾杯ー!」

「かんぱーい」

開けたばかりのフォビドゥンサイダーのグラスを重ね、くいと傾ければ喉に弾ける禁忌の炭酸。冷えた旧型^{オールド}なアルコールの野趣な味わいに思わず頬も綻ぶ。

専任の教授が課した面倒くさい課題を研究室の机に叩き込み、やっと迎えた週末。気分も踊ろうというものだ。しゅわしゅわと弾ける炭酸に包まれ、解放感がグラスの上に溢れ出す。

「二週間ぶりのお酒はたまらないわねえ。やっぱりこういう時は旧型酒に限るわ」

「蓮子がもつと計画的だったら、ここまで追い詰められる事もなかったと思うんだけど」

「あはは、でもそれじゃこの解放感も味わえなかったわよ。Dr. レイテンシー?」

「詭弁ねえ……」

口を尖らせる相棒に、ね？ とウインクひとつ。早速空になったグラスに、メリー、自分の順でサイダーを注ぐ。禁断の知恵がもたらすアルコールは、塩と油分の塊みたいなフィッシュアンドチップスと相性抜群だ。読めない文字を印刷された包み紙の新聞に指先を拭う。

「それでね、次の本の話なんだけど」

「あら、蓮子にはもう何かプランがあるの？」

今日の話題は、燕石博物誌の続刊となる予定の同人誌だ。オールドアダムの常連たちを通じて新しく得た不思議の糸口は、私達に新しい不思議との遭遇を与えてくれた。それをまとめて次の本にしようという計画である。幸い、燕石博物誌はそこそこ好評で、頒布時にも知り合いになったサークルと一緒に次のイベントにも参加を決めてある。

「ちよつと試してみたい装丁もあるのよ。今度は私も何か書いてみようかなって」

「今度は蓮子もペンネームを考えないといけないわね」

既に頭の中にはいくつかプロットもできている。課題とかで追い詰められている時は、まったくこういうアイディアばかり浮かぶものなのだ。

テーブルの上にタブレットを広げ、新しいサイダーの瓶と一緒にまだ見ぬ新刊にあれこれと想像を巡らせていた時。

カラン、と入口のベルが鳴る。珍しい。この時間にはあまり来客もないはずなのに。

3 オールドアダムパラドックス

ふと、メリーの肩越しにそちらを見上げた私は、そのままの姿勢でしばし絶句。

「どうしたの？ 蓮……」

間拔けな私の顔を覗き込んで、背後を振り返ったメリーも目を丸くする。

滅多に新顔の現れないオールドアダムでは、だいたいの来客は顔見知りだ。5回も来店すればだいたいの常連の顔は覚えてしまう。けれど、今日入り口をくぐってやってきたのは、あまりにも予想外で、実に見覚えのある二人組であったからだ。

「な、なにこれ?!」

「……どうということ?」

黒い帽子にケープ、ブラウスにスカートの宇佐見蓮子。金髪にモブキャップ、紫のブラウスのマエリベリー・ハーン。

そしてまた、なんともややこしい事に。

やってきたあちらの秘封倶楽部ふたりも、私達を見て驚きの声を上げていた。

▼ 2007/10/28 21:48 先斗町通三条下ル無花果町 バー・オールドアダム?

それから一時間あまりが過ぎて。

オールドアダムには、実に理解しがたい光景が広がっていた。

「これは……なんとも」

秘封倶楽部は曲がりなりにもオカルトサークルである。それも結界の隙間を探し境界を暴く、非合法な活動も辞さない不良サークルだ。これまでだつてそれなりに成果を上げ、人には言えない不思議な体験をしてきた。蓮台野に咲く満開の夜桜、異世界の竹林を彷徨い遭遇した炎の化け物。L4ラグランジュポイントに眠る、原始の緑に覆われたトリフネ遺跡。

けれど。

馴染みになったバーに、自分達とそっくりな二人組が次々と、山のように押し掛けて、無数の秘封倶楽部と顔を突き合わせるなんて体験、流石に想定外も想定外。いくらなんでも非日常が過ぎるという話であつた。

「壮観ねえ」

頭を抱える私の隣で、なんとも能天気な感想を漏らすメリー。

[illegible]

ざっと見渡す視界の中にだけでも、同じ顔がそれぞれ数百。それぞれが連れ立つ相手と顔を突き合わせ、周りを見回しながら様子をうかがい、囁き交わしている。きっとその総数は百万よりもなお多い。

「いつの間にこんなに増えたのかしら、私達」

「……課題をやった間なのは確かね」

もしかして旧型酒の悪酔いだろうか、空っぽのフオビドウンサイダーの瓶を覗きこんでみたりもしたが、キラキラ輝くガラスの向こうには、やっぱり見知った顔、顔、顔。

ほたりとほつぺに落ちてきた冷たい雫を拭って吐息する。

「私達の他にも、こんなに秘封倶楽部って居たのね。下手したら京都の人口より多そうよ」

「なんとも穏やかじゃないわね……」

この京都に限っても、オカルトサークルなんてごまんとある。公式に届け出ている団体はその名前を調べる方法だつてあるけれど、私達のような不良オカルトサークルともなれば、その活動はアンダーグラウンドなものだ。

「でも蓮子？ 数が多いってことは、それだけ偶然被るってこともあると思うんだけど」

「それは否定しないけど、そっくりさんが居ていい理由にはならないと思うの」

「もっともな話ね」

ぐるりと店内を見回す。顔が映るくらいぴかぴかに良く磨き込まれたテーブル、歴史とアルコールと煙草が染みついたカウンター、萎れかけたままの観葉植物、演出なのかマスターのズボラなのか色褪せたメニュー、音の飛びがちな骨董品のジュークボックス。

内装の一つ一つはどれも見覚えのあるオールドアダムの調度だが、じっと眺めていくとそのフロアがいつの間にか、数キロ先まで続いているのだ。

見慣れた光景ばかりで構成された知らない場所という奇妙な視界に、頭がくらくらする。

メリーに確認したところ、ここはもう境界をくぐり抜けた先だという。しかしいつ境界を抜けたのかは、メリーにも覚えがないらしかった。一番怪しいのは入り口のドアだが、そもそも冷静に考えて、オールドアダムはこんなに大勢が詰めかけられるような店ではないのだ。

「ともあれ、こうして呆けてたって始まらないわね」

まずは行動。私は席を立て、手近な人影に声をかけた。と言ってもこの部屋の中に存在するのはメリーか蓮子の2種類のみであり、私の相手たるメリーはこうしてすぐ側にいるわけで、そちらを選ぶのはなんとなく憚られた。

必然的に、呼び止められたのはもう一人の私……宇佐見蓮子となる。

「ねえ、貴方」

「なに？」

振り向き、帽子の下から物怖じせず真っ直ぐにこちらを見つめる瞳。何の変哲もない黒い目は、けれど強い意志を宿し、じっと見ているとまるで吸い込まれてしまいそうな錯覚を覚える。毎日鏡の向こうによく見る美少女であるが、こうやって鏡像じゃない自分が動いて喋るってのはなんともすごい違和感だ。

「あなたの名前、聞いてもいいかしら」

「……もうこれで17回目よ」

うんざりとした顔で、向こうの私——蓮子βはこめかみをつつき、

「私は宇佐見蓮子。専攻は超統一物理学。オカルトサークル秘封倶楽部のメンバーよ」

「奇遇ねえ。私も宇佐見蓮子なのよ」

「でしょうね」

さすが私、既に状況はしつかり把握済みのようだ。

髪長さとか、着ている服とか。よく見ればそれぞれに小さな差はあるけれど、基本的にとても良く似た私だった。蓮子βは、ついとこちらの隣へと視線を向け、胡乱げに目を細める。

「で、そちらがあなたの相棒？」

「ええ。奇遇ね。あなたと同じく、私の相棒もメリーなのよ」

「はじめまして……でいいのかしら？」

「はじめまして、でいいんじゃないかしら」

小首を傾げた後、そつと自己紹介をするメリーとメリーβ。なんとも暢気な様子で親交を深めている二人を尻目に、蓮子βは吐息をひとつ挟み、私のテーブルへと腰を下ろす。

「あなたも私なんだから、だいたいことは予想できてると思うけど。一応分かっていることを教えておくわ。ここはおそらく、境界の向こうに作られた、もうひとつの旧約酒場^{オールドアダム}。広さはお

およそ無限大。……少なくとも、私達の誰も部屋の端っこを見つけられてないわ。マスターもいないし他のお客さんもない。当然ながら他の出口もない。ドアも窓も開かないわ。脱出手段は今のところ皆目見当つかず」

「これはどうもご親切に。感謝するわ、私」

「あなたも私なんだから、そのうち同じことを考えるし同じことに気付くのよ。ここで意地悪したところで一緒なもの」

なるほど。私が考えるような事は、他の私達も考え付いているということか。早速意気投合した様子のメリーさんとメリーβを眺めつつ、私は唇に指を触れさせた。

「ねえ、蓮子β」

「私から見ればあなたがβなんだけど」

なるほど。ここで『βって何よう』みたいな事を言い出さないところ、本当に私なんだなあ。

「……まあそこは主観で許してちょうだい。一つ確認したいんだけど。ここに集められてるのは秘封倶楽部だけってことでいいのよね？」

返事は目の前からではなく、隣からやってきた。

「ああ。その通りだよ」

「うげ」

思わず揃ってそちらに眼を向け、私達が一斉に唸ってしまったのは、決して大袈裟な反応ではなかったはずだ。

▼ 2067/10/28 21:57 ♪♪♪♪♪♪♪♪ バー・オールドアダム♪

自分そっくりの顔をした異性。そいつを前にした瞬間の実に筆舌に尽くしがたい感覚を、ぜひご想像いただきたい。自分じゃない自分が親しげにそこに存在するという光景は、悪夢といふかなんというか。二人揃って顔をしかめた私達に、そいつもまた実に微妙な表情をしながら答えた。

「そんな顔をされるとこっちも困るんだよな。僕だって同じ気分なんだから。そっちの僕の想像の通り、ここは多分、秘封倶楽部の可能性が集められている場所だよ」

宇佐美蓮司なんだかと名乗った（だが断じて蓮子と呼ぶ）彼は、私が口にしようにしたことを先回りして説明した。頭の中を読まれてるみたいで気持ち悪いけど、これは向こうの私に読心能力があるわけじゃなく、やはりこんな外見でも私だから私と同じことを思いついているということなのだろう。

「大分、差異はあるみたいだけどね」

紹介するよと彼が呼び寄せるのは、やはりというかなんというか金髪的美青年のメリーだった。スラックスにブラウスの姿が、彼の世界の秘封倶楽部なのだろう。妙に距離が近いという

か、顔と顔が近いのが気になる。……が、突っ込むのはやめておいた。

「……わりとかっこいいわね」

「ちよっと、メリー？」

どうにも、メリーは他のメリーに対してやけに評価が高いというか警戒のハードルが高い気がする。同じ自分だからってそうも簡単に信用していいものか……というところまで思い至り、「そこを真面目に悩むと自己評価の問題に入り込むから、あまり真剣に考えない方がいいわ」

「……ご忠告どうも」

蓮子βからの言葉に頭を抱える。やりにくいなあもう。

改めて辺りを見回してみれば、ここに集まった私達は、皆それぞれに少しずつ違っていた。それは外見であったり、言動であったり、服装であったり、時に性別であったり年齢であったりと様々だったが、観察する限りその姿に全く同じものは見当たらなかった。

それでいて、宇佐見蓮子は宇佐見蓮子、マエリベリー・ハーンはマエリベリー・ハーンだとすぐに分かるのだ。そう思って視線を巡らせれば、

「えい」

「きゃあ!？」

「ちよっと、なにしてるの蓮子?！」

「いやあその。あっちのメリーさんがあまり見事だったもんでつい」

向こうの大テーブル、メリーσの大きなおっぱいに手を伸ばしてメリーδに怒られている蓮子δ。一緒になって怒る蓮子σもそれに加わり、まったくもって騒がしい。

「メリー、もうやだー、帰るー!」

「ほらほら、へソ曲げないの。こんなの滅多にない不思議体験じゃない」

「やだー! かえるのー!」

「もう、蓮子ったらわがままねえ。私が一緒でも嫌?」

メリーεの膝の上に抱えられ、ぐずる黒髪幼女こと蓮子ε。舌ったらずな甘い声の抗議を、どこ吹き風とあやすメリーεの表情はいまにも溶け落ちそうなアイスクリームみたいだ。

おでこをぐりぐりと寄せ合うメリーεに、蓮子εはむうと膨れながら、小さく首を横に振った。満面の笑顔のメリーεがばしゃばしゃと携帯のフラッシュを焚く。

「……いくらなんでもあれ、犯罪じゃないかしら」

「そもそも幼女をバーに連れてくるのが問題な気がするわ」

「そうかしら。可愛いじゃない? ねえ」

「ええ。蓮子もあれくらい素直だといいのにねえ」

眉をひそめる蓮子一同の統一見解に対し、メリーさん一同はこれに強く異議を唱える。しか

し蓮子は断固としてメリーの意見には反対である。

……かと思えば、向こうでは尖ったナイフのように剣呑な気配を振り撒いている、義手義足の蓮子。周囲の蓮子とメリーが遠巻きに見守る中、一人でグラスを重ねる彼女は、活動中の事故でメリーを失ったらしい。あっちの私は実にシリアスな世界に生きているようだ。

「懐かしいわねえ。最近すっかりこんな事も無くなっちゃったから」

「そうね。昔は随分無茶をしたものねえ」

「久々の同窓会に、誰かが気を利かせてくれたのかしらね」

その向こうでは穏やかにテーブルを囲み、思い出話に花を咲かせる蓮子りとメリー。どちらも素敵なおばさまといった気配で、そのやりとりはなんだかちよっとうらやましい。

ざっと見て20年後くらい未来の私達だろうか？ あれが私達の未来かというとまた少し話は違ふんだろうけど。

「まあ、おおむね分かったわ。ここにいるのは私達の並行世界。可能性問題なのね」

無数の並行世界の秘封倶楽部のバリエーション。そのどれもが、秘封倶楽部の可能性ということだ。その中での共通項は、多分――

「日付無きバー・オールドアダム。時間の流れが意味をもたない世界。つまり、この旧約酒場が存在する世界線の秘封倶楽部が境界の中に重なり合わさってこんな状態が発生しているって

ことだね？」

「冴えてるわね。さすが私」

あまり同意したくない蓮子 γ に、さらりと同意する蓮子 β 。まあ彼の言っている事は確かに正しくて、ここに集められた私達は、この状況に困惑はしていても、この場所に困惑はしていない。それはつまり、この場の私達は全て、オールドアダムを知っているということだ。逆説的に、ここに集まった秘封倶楽部は、あらゆる可能性の中のほんの一部。

バー・オールドアダムの事なんか知りもしないで活動している私達は、ここに来る事はないのだろう。

「でも、偶然でこんなことが起こるものかしら？」

メリーがメリー δ （おっぱい大きい）と一緒に聞いてくる。ううむ。改めて見ても半端なメリー δ （おっぱい大きい）の可能性。……ところで、これだけ数のある私の可能性世界の中に、たわわな宇佐見蓮子ちゃんの可能性が見当たらない件についても少し詳しく。

閑話休題

「要するに、誰かが意図的にこの状況を引き起こしてるってこと？」

「そうじゃないと腑に落ちないことがあるわね。参考までに聞くけど、あなた達、これまでサークル活動でどんなことをしてきたの？」

「……？ 地底の翡翠の桜を見に行ったり、海の底で喋るクジラを追いかけたり、勝手に動き出す道具を探して空のお城を探したりよ」

彼女たちの語る活動は、私達の記憶にあるものとは大きく違うものだった。試しに、蓮子βと手分けして他の秘封倶楽部たちに同じことを訊ねてみるが、その活動内容はどれもこれも千差万別。クレヨンの聖剣を持つ怪獣画伯を訊ね、泥んこのお城を探検したメリーεと蓮子ε、遠野の山を訪ね歩き天狗や山猫の食堂を捜し歩いた蓮子δにメリーδ。もう引退して長いという蓮子ηとメリーηも、若いころはアメリカの荒野に落ちてくる流れ星を捕まえに行ったりとワイルドな冒険をしていたという。

そんな、千差万別の冒険を経験した百万通りの秘封倶楽部は、しかしこの旧約酒場という一つのキーワードで交錯している。あるいは、それを綴るDr. レイテンシーの名で。

「……成程ね。全くの偶然って可能性は捨てきれないけど。今の私達の交錯の原因になったのがここなんじゃないかしら」

「たぶんそうよ。異論はないわ」

オールドアダムの内装を示す私に応えたのはまた別の声。車椅子に座ったメリーθと共に、蓮子θが自嘲めいて同意する。

「私達までここに呼ばれたってことは、その可能性が高そうね。ここには嫌な思い出しが無

もの。もう二度とオカルトに関わるなんてごめんだったのにね」

車椅子に座るメリーは、これに対して反応を見せない。いつものドレスを着てはいるものの、その手足は細り、落ち窪んだ眼窩を覆うように包帯が巻かれていた。彼女達も何やら相当ハードな経験を経た私達みたいだ。

「……あまり触れないであげて。さっき僕もやらかしたんだけど、あのメリーは色んなものを見すぎて、耐え切れずに自分で眼を潰しちゃったらしい」

「……………」

蓮子から耳打ちされた二人の内情に、私は陰鬱な気分で眉をよじる。

ああ、私達にはこういう可能性だってあるのか。こうやってそれを見せつけることが、この異変を起こした誰かの目的ということなのだろうか。

その時。ふと脳裏をよぎるものがあつた。

「……ああ。そっか。分かった気がするわ。これを起こしたのは誰なのか」

「本当？」

ぽんと手を叩いた私のその言葉に、一斉に周囲の私達が振り向いた。

「この場の私達が一つの共通項で結ばれてるなら、その中で例外を探せばいいの。つまり、相棒のいない秘封倶楽部よ」

皆の注目の中、指を立てて説明する私に、その場の全員が一斉に振り返る。その視線の先には――相棒たるメリーを連れていない、片目の少女。蓮子と。

私たちは、宇佐見蓮子は。唯一無二の相棒であるメリーを知っている。けれど。

「あなたにだけそのメリーがいない。それがあなたがここに私達を呼び寄せた理由よ。結果暴きの中で起きた不幸な事故。さっきそう言ってたわよね。あなたはそこで失われたメリーを探して、この騒ぎを引き起こした。もしかしたら、自分にぴったりのメリーが……蓮子を失ったメリーがここにいるかもしれないから。違うかしら？」

指摘の中にざわめきが起る。蓮子とは不敵に微笑んで、私に相対した。

「名推理ね。根拠を聞いてもいいかしら？ 探偵さんの私」

「言い逃れは美しくないわね。自明のことじゃないかしら？ ここに集まっているのは全員、宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーン。二人で一つの秘封倶楽部よ。その条件を満たしていないあ

あなたが、どうしてここに居るのかしら」

「……そう。それが理由？　でも悪いけれど、私の相棒はちゃんというのよ」

彼女はそうつぶやいて、機械音のする義手で顔半分の火傷を覆う髪を持ち上げて見せた。

「ほら、ここにね」

その光景に、私は思わず息を飲む。

顔半分を覆う傷痕の中、開いた瞼の奥あるのは——青にも、赤にも黄金色にも見える、私の、私達の良く知っている、境界を知る瞳。

自分の目元、自分のものとは違う瞳をそっと、慈しむように撫でて、彼女は独白する。

「念願かなっての月旅行の直前だったわ。秘封倶楽部サークル活動の総決算。なのに、軌道エレベータの事故なんて、お話にもならない結末よ。境界の向こうを見過ぎた代償に、境界の歪みがケーブルを千切ったの。無軌道なサークル活動で、何が危険なのかも分からないまま、危ないことを繰り返して。——あの事故は私から目を、メリーから命を奪ったわ」

相棒の眼球を移植した宇佐見蓮子。二人で一つの秘封倶楽部。蓮子と。

「でも、私達は秘封倶楽部よ。こうして変わることなく、二人で一つの秘封倶楽部。……ねえ、これ以上ないくらいに、私こそここに居るのがぴったりにじゃないかしら？」

もう二度と、分かたれることのない私たち。

二つの目を備えた蓮子とは、じつと視線を宙に放る。

「今ので確信したわ。……この異変の犯人がだれなのか」

「?!」

どよめきが起る。ざわざわと波打つオールドアダムの店内に、良く通る彼女の声が響いた。

「私はね、蓮子でもあると同時にメリーでもあるの。この右目のおかげで、私には、時間と場所と、境界の在り処が分かる」

「ちよ、ちよっと待って。あなたが犯人じゃないって、まだ決まったわけじゃ——」

声を上げかけた蓮子βを制して、蓮子αは一人の蓮子を指差した。

「ええ、ただの勘。でもね、ここにいるのは、みんな私達よ。誰でもない、オカルトサークル秘封倶楽部の私達よ。二人が揃っての秘封倶楽部。あなたが言った通りじゃない。……それなのになんであなたは相棒を放ったらかして、ほかのメリーさんにうつつを抜かしてるのかしら」
彼女の視線の先にあったのは、蓮子δ。

とんでもない言いがかり。少なくとも私にはそう思えた。推論の上に推論を重ねた、推理とも言えないでたらめ。だから、抗弁すればいい筈だった。

私を含め、半数近くの蓮子たちがそう思ったらしい。

けれど、蓮子δは俯いて、唇を嚙み——それ以上の言葉を発しない。

「些細な理由だったと思うの。一緒に入ろうと思った喫茶店が違ったとか。旅行先の予定が上手く合わなかったとか。待ち合わせ時に、服の趣味が合わなかったとか。いつもの遅刻をちょっとだけ強く咎められたとか。それで、あなたは思ってしまったんじゃないかしら。どこかに、もっと自分にぴったりの相棒がいるんじゃないかって」

「そ、そんなの——」

「そう。誰だって考えることよ。私だって、ううん、誰でもない、私の事だから解るわ。まあ、その……メリーには悪いけど、そういうのを考えた事、あるもの」

「蓮子……」

ここは可能性の集積場。あり得た可能性。それはつまり、とんでもなく低い確率でも、ありうる秘封倶楽部の姿ならば、間違いなく存在するのだ。

「それはそれとして、今の件あとで詳しく聞かせて貰うわね」

ぼそりと低い声のメリーさんに、そこら中で一斉に咳払いが起こる。

独り身の蓮子だけが苦笑していた。

「……ええと。お互いのややこしい問題はそれぞれ身内で解決するとして。続けるわよ！

あなたはその些細な願いを叶えてしまった宇佐見蓮子。天文学的なあり得ない可能性を、運良く……運悪くかしら。引き寄せてしまった宇佐見蓮子じゃないかな」

私の言葉に、蓮子δは答えない。

じっと俯いて、ただ、メリーδの視線から顔を反らし続けている。

指摘と一緒に湧き起る居心地の悪さ。この後ろめたさはたぶん、彼女が抱えているものと同じもので。彼女と同じ、私を知るべき後悔なんだろう。

「だから、あなたにならこの異変が解ける。違う？」

ほんの少し。じっと見ていた私がぎりぎり、気付く事ができるくらいのささやかな動きで。蓮子δはちいさく頷いた。

この異変の原因が何かのマジックアイテムによるものなのか。特別な変異を遂げた私の眼によるものなのか。あるいは、彼女の相棒たるメリーδの能力によるものなのかまでは分からない。もしかしたら、この矛盾だらけのオールドアダムでは、口にさえ出さなければその原因すら確定しないものかもしれない。

匣を開けなければ、シュレディンガーの化猫はいつまでも元氣だ。
やがて。

そっとその隣に歩み寄ったメリーδが伸ばした手に、おっかなびっくり触れて。
蓮子δがゆっくりと顔を上げる。

そうして、ぐると視界が揺れた。

▼ 2017/10/28 21:15 先斗町通三条下ル無花果町 バー・オールドアダム

気付けば喧騒が戻ってきていた。カウンターの奥でグラスを磨くマスター、顔を突き合わせ
て論じるおじさん達、古い英字新聞を眺める老紳士、次のオカルト探検を計画する男女グルー
プ。それぞれが思い思いに、不健康な旧型酒を酌み交わし、性質の悪い酔いに身を委ねる
雑多で、古くて、どこか薄汚れた、いつものオールドアダムの風景だった。

テーブルの上には空になったフォビドゥンサイダーの瓶が1ダース。

「……あえ」

気付けば呂律も怪しく、視界がぐらぐらと揺れる。いつの間にこんなに飲んだのだろうと思
考を巡らせるが、禁忌の旧型アルコールは大脳皮質の隅々まで浸透して、人類の理性はあえな
くその前に敗北を喫する。

「……………」

すぐ目の前では、テーブルに突っ伏してすやすやと寝息を立てるメリーさん。そのやわらか
そうなほっぺに指を触れさせると、むにや、と眠たげに顔を上げる。

「? なに、蓮子……」

「メリー？」

がばとテーブルの上に身を乗り出し、メリーと臉が触れそうな距離まで顔を近づけて。

念入りに、慎重に、酔いの回った頭でじいっとその顔を覗きこんだ。上から下まで、何度も何度も、じっくり繰り返し。数十秒。

なぜだか（アルコールのせいかな）真っ赤になっている彼女が、どこからどう見ても、私の良く知るメリーであることを確認して、一安心。

そっと額の汗を拭う。

「……よかった。ちゃんとメリーだ」

「なにがよっ」

失礼ね、と怒るメリーに。あははと笑って。

私は新しく注文したフオビドウンサイダーを開け、メリーの手握らせたもう一本にカキンと触れさせる。冷えた炭酸がしゅわしゅわと弾け、知恵の実の夢はまどろむ酔いの泡の中に消えていった。

【奥付】

「オールドアダムパラドックス α 」

平成二十八年十月三十日 科学世紀のカフェテラス6

発行 折葉坂三番地 (<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅折葉

印刷所 八雲出版



※本作は「上海アリス幻樂団」様の「東方Project」の二次創作です。
作中に登場するいかなる人物、組織も実在のものとは関係ありません。